

# Full Magazine 翻訳

Madama Butterfly 2011 年 8 月 12 日(金)

バタフライの原点を求めて

著者: Silvia Cosentino – Full Magazine 主筆

8月11日(木)、Torre del Lago 野外大劇場で第二回目の Madama Butterfly 公演がおこなわれた。それはプッチーニフェスティバル財団、東京の NPO 共催、日本の首都のイタリア文化会館の協力、歌手で演出家・岡村喬生になる上演で、巨匠の大作を興味深い、言語的方法で飾り立てた。

かつては大作品には何も付け足すことは出来ず、その作者が示すように上演するのが通例だったことを考えよう。プッチーニの創造物である、この蝶々は、Giovanni Pascoli が予言したように、自動車事故で遅くなったり、作曲上のためらいや再考のため、そして、本物が煽動されたものか解らないスカラ座でのデビュー時の騒動などがあつたが、際立った飛翔を続けた。結局、議論の余地無く、蝶は休むことなく東洋から西洋まで、古い言い方をすれば、世界中の劇場を仰天させながら飛び続けているのである。

バリトン、岡村喬生は東京に生まれ、みんなのオペラ(Opera del Popolo)協会の芸術監督を務めるが、プッチーニと台本作家イヅリカとジャコーザの原作を損なうことなく、それらを乗り越え、重要な価値を付け足し、“彼の”バタフライは日本文化の根本を訪ねるものとなった。細部に亘り、全ての曖昧だったものが抽出されて明白となった。作者の見落としのみならず、完全に清い泉に達することが不可能なものまでが。舞台全体が、詳細な表情から、用語、この国民独自の振る舞い、舞台上の、群集の、見ることが誠に困難な手振り身振りが。

川口直次がエデンの園のようなデザインを創造した。舞台前部に繊細な花、サイドに豊饒な木々を配し。真ん中にはバタフライの家の屋根と家を覆う桜の大木。家は、左に仏像を置く祭壇のある和室、右に十字架と日米の国旗を配し純洋風家具の置かれた洋室とに、桜の幹で分かれる。奥は長崎港を詩的に想い出すマサチウッコリ湖のために開けてある。それは、彼らのお辞儀や、優雅な芸者の踊り、など、日本の儀式からとられた、岡村が意図した額縁からの深い反映である。(舞台には有名な、私と同時代の着物作家・千地泰弘の素晴らしい色彩に富んだ着物を着た本当の舞子もいた)。そして、本能的な狂気の行動ではなく、高貴な行動である、理性的な、自覚的な、完璧な仕草でのほらきり。(——\* 日本的自殺行為を西欧人は、はら、と、きり、の意味も知らずに「はらきり」だと思っている)。演出家・岡村は特に、宗教の出会いと対立を、それを意識せずに、ぎごちないやり方で、それに値しない十字架受難的献身を尽くす蝶々さんに見て、彼女に視点を当てる。着物姿で仏像にひれ伏し、襟にキリスト教徒のシンボルをつけた洋服姿で。この不治のコン

トラストの強調に貢献したのは Fabrizio Ganzerli の詩的な照明。家の障子の裏から当てた影絵、場所の魅惑、色彩に富む照明に与えられた嘆声の拍手、主役の繊細さとの相対的な適合、トゥレデルラーゴの自然の額縁、月も姿を見せた、ハミング合唱の間のほぼ完全な暗転。

Valerio Galli は、バタフライの性格にもとづく dolce や、悲劇の属性である gravi に重点を当てて、フェスティヴァル・オーケストラをエネルギッシュに指揮した。歌手陣は岡村の解釈通りに良く纏まることができた。まず Massimiliano Pisapia。もはやピンカートンは“彼の”役と言える。他の説得力のある歌唱；蝶々さんの綾に包まれた二宮咲子。日本人的すべての動きが正確な Mariella Guarnera のすずき。いつも成り行きを舞台上で見守る、普遍的仮面の女術ブッフオ・ごろーの高橋淳。シャープレスを演じた Sergio Bologna は、ことの成り行きがもたらす悲劇を推量する役目をこなした。二組の数が合って皆が揃うとき、厚かましい姿勢のピンカートンの取り巻きのアメリカ人達と、反対につつましく慣習に従った蝶々さんの家族達の見事な対比。

疑いも無く世界中を魅了し感動させるであろうこの上演の成功は、かくも異なる二つの文化（とその遺産）を何らかの方法でそれを融合し、プッチーニが吹き込んだ天才的な音楽に強い普遍のメッセージを託して、更なる発展を祈るものである。

6-11-18 8月

## **マダム バタフライ**

Luigi Illica と Giuseppe Giacosa による2幕の 日本の悲劇

Giacomo Puccini 作曲

NPO東京との新製作

指揮: Valerio Galli

演出: 岡村喬生

美術: 川口直次

衣裳: 千地泰弘

蝶々さん: 二宮咲子

すずき: Mariella Guarnera(6-11 8月) / 末広貴美子(18 8月)

ケート・ピンカートン: Alessandra Meozzi

B.F. ピンカートン: Massimiliano Pisapia(6-11 8月) / Leonardo Caimi(18 8月)

シャープレス: Sergio Bologna

ごろー: 高橋淳

ぼんぞー: Choi Seung Pil

やまどり: Veio Torcigliani

**官吏: Daniele Piscopo**

**書記: Claudio Minardi**

**従姉: Zahao Xuan**

**叔母: Marianna Lanci**

**母: Monica Arcangeli**

**やくしで: Antonio Tirro**

**Dolore: Martina Donati**

**照明: Fabrizio Ganzerli**

**演出助手: Luca Ramaciotti**

**プッチーニフェスティヴァル・オーケストラ**

**プッチーニフェスティヴァル合唱団**

**合唱指揮: Francesca Tosi**